

えりも岬国有林緑化事業の取組と今後の展望

日高南部森林管理署 治山技術官 佐々木 健司
北海道大学総合博物館 研究員 春木 雅寛

事業の背景・目的

えりも岬緑化事業は昭和28年（1953年）の旧浦河営林署えりも治山事業所開設以来、試行錯誤を繰り返しながら官民あげでの努力により成果をあげてきています。

当時は「えりも砂漠」と呼ばれるほど大地が荒廃していましたが、事業開始から20年後には「えりも海岸林の顔」といわれるクロマツを主とする林分となり、現在、森林として甦ってきています。

先代の方々が再生してきた海岸林を、より良い森林にしていくために現在も広葉樹の植栽など緑化事業は続けられています。

現在は、かつて見られたと思われる天然林をモデルとした多様な樹種が混在する林分を造成しています（えりも岬国有林内除伐試験地）



緑化事業開始から約60年で
200haのクロマツを主とする
美しい海岸林の造成に成功



えりも砂漠と呼ばれていた
当時（1950年）の海岸の様子

明治時代から開拓が行われ、植生が失われたため荒廃。

年平均風速は8.0m/s、風速10m/s以上の日が年間250日以上にも及び、20m/sを越える日数も40日を越えるなど、全国でも屈指の強風地帯。

事業の内容・成果

木本緑化の第一歩としてハードルフェンスの活用による“制風”が植栽木の成長のカギとなりました。

また、クロマツ植栽地では3列残して2列を伐採する「本数調整伐」の実施により、クロマツの枯死を抑えるとともに広葉樹の樹下植栽により混交林化を促すことに成功しました。

今後の展望

今後は、現在の海岸林を維持しつつも、えりも地方にかつて見られたと思われる“多様な植物、20種近い高木種から構成された天然林”に近づけていくことが目標であるといえます。

最終的には、クロマツ一斉林から郷土樹種を核とした多種多様な林分に転換することで、災害に強く、えりも岬地区の生活環境向上と地域振興に寄与する森林づくりを目指していきたいと考えています。